
Cross & Ballet

OGRE-ASHYURA+1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Cross&Ballet

【Nコード】

N3815X

【作者名】

OGRE - ASHYURA + 1

【あらすじ】

近未来、圧倒的な力を誇る兵器である『高機動破壊兵装』を操る
少年少女の生活や苦悩を描くストーリー

聖騎士の力

体から感覚の殆どが抜け落ちていく……。その中で妙に強く感じるのは爆弾の落ちる轟音……。煤と硝煙臭い風の匂い……。何よりも……人間が焦げる生々しい匂いと周囲一帯を包むように立ち込める血の匂い。その少年の白銀の髪には彼の物だけではない大量の血液がべったり付き、何があったのかはわからない……。だが、肩が裂けた傷口……。歪な動き方からわかる消えた右目の視力。段々とその感覚が強まる……。両手には……。感じたことのない束縛感と……。暴走する……。『力』。

「はっ！！……………ハア、ハア、ハア、また、か……………」

实用性に富み広いが内装の無駄な華美さが気に入らないこの部屋。あれから何年かが経過した。その間には多くの変化が俺に起きている。負傷して一度は失明した俺の右目の視力は現代の最先端治療にあたる医療用ナノマシンにより以前と同程度まで回復した。そのように体の傷は回復し多くは前と変わらない状態になっている。しかし、俺のもとに返らない物も多くあった。……………けして、返ってこない『物』が……。少しの間、古くて苦い……………鮮烈な記憶を見つめるように目を閉じて居ると、俺の部屋の戸をノックする音が聞こえた。控えめなノックは俺のことを気づかっただろう。それに……………こんな時間に俺の部屋に来る人間などあらかた決まっている。おそらく、副官のような立場の女学生……………レヴィだろう。入室の許可を出すとゆっくりと扉を開きブーツの音を等間隔に響かせる黒髪の女生徒が俺の目の前に現れた。黒っぽい軍服をまとい、力強い歩み、女性にしては少し気迫や殺気と言った闘気に満ちた人物だ。聞いた話によれば髪型は俺に合わせてポニーテールをしているらしい。俺は実務机を一瞬だけ見た後に彼女を見ると俺を心配しているらしく

大きなオッドアイの目を細めてこちらを見つめている。彼女は付き合いが長い。いや、そんな色気のある話ではないさ。戦場で共に肩を並べた相棒のような立場か。そんな彼女を見てみると昔を思い出してしまい少し心苦しい。俺が苦しむ理由？ それは後々に話そう。俺だけのことを述べてしまえば俺は『あの日』を境に重い戒めを胸に刻み込んで生きてきた。泰平の時代などこの世界にはないのだ。あの日以来、髪は腰より長くなるまで伸ばし続けた。今もその形だ。俺の誓いの証だと思ってくれればいい。彼女も同様な足枷がある。目の前のレヴィは俺が口を開く前に放つ空気に似合わぬ割高で女性らしい声域の声を放った。それこそ、彼女は戦場に居なければ歌い鳥のような声で平穩に少女として生きて居られたのだ。その彼女はやたらと俺を心配する。俺と彼女の出会いも後程話すとして、今は彼女の気遣いを受けてみることにした。受けられるものならばだが。

「どうされましたか？ クリード様」

「気にするな。いつもの『夢』だよ」

「は、……では、失礼します。何かございましたらお気軽にお声をかけください。いつでも参ります」

「いや、大丈夫だ。お前もたまには眠ったらどうだ？」

「いえ、私はあなたを警護するという任務がございますゆえ。お心向くままにお呼びください。……あなたが私を求めていてくださる間はあなたをお守りし続けます」

心配そうな少女の顔からキビキビした命令に実直な軍人の顔に戻ったレヴィは黒髪を翻し背筋を伸ばして敬礼するとキチキチした型道理の歩き方でその場から離れていく。扉の前で再び一礼し退出後、扉が閉まる音がすると俺の部屋は再び夜の静寂に沈んでいく。一人で使うには広すぎる部屋には数個の家具しかない。タンス、ベッド、衝立、実務机と元々内装として置かれていた装飾品……。気になる者も多いと思われるから先に伝えよう。彼女がどうしてこんなに早

く来たかと言えば彼女の……レヴィの部屋はこの部屋の隣の部屋だからだ。彼女の強い意向で本来は別館の女子寮に当てられたはずの部屋をこちらに移したのだ。更に言えばここは養育生を含めれば10歳から20歳までの少年兵が住まう寄宿舎で特待生の住まう完全自活式の学生寮と言えよう。……だが、ただの少年兵ではない。国連軍総裁直轄部隊、『セイバース』の寄宿舎だ。世界最高機密の超高性能な新型兵器……日本名を『高機動破壊兵装』。また、英式名称は『High Mobile Breaking Soldier Armor System』だ。通称、『HMBSAS』。プロトタイプの制作者は日本人。世界初の個人所有軍事兵装設計でその動力源のエンジンを始めとしエネルギー用バッテリー、外装、神経伝達配線、意識共有化システムなどは全てブラックボックスの中。各国に存在するらしい初代技師の弟子達しか知り得ない構造らしい。機体の説明など実習の時でいいか。早朝になり寮の中で料理を作る担当の女子学生が食堂で朝食を作っている。俺が食堂に入ると途端に空気が変わった。料理担当以外は皆が起立して敬礼してくる。俺は手で払い、食事の続きをさせた。……指定の座席につく。するとレヴィが俺の分らしい食事と自分の食事を運んできた。席につくとやはり俺を心配しだす。

「やはり……、お加減がよろしくないのでしょうか。今日の執務は私がおこないますゆえ、お休みください」
「いや、お前にも俺にも学園がある。簡単には休めないだろう。それに体調は悪くない。むしろ、力は無駄に漲るくらいだ」

今のパイロットが皆、20歳以下なのには理由がある。破壊兵装が使用可能なのは今のところ、俺達を第一世代にした第三次世界大戦を経験した子供くらいだろうからだ。大人でこの兵装の操縦に慣れることができた人間は未だかつて聞いたことがない。いや、……兵装システムの関係から無理なのだ。この兵装には感情のような『

意識』が存在する。そのために幼い頃からの長時間訓練を必要とした。いくら搭乗することができたとしても……、戦闘ができる程に精密には扱えないのだ。そのため、昔の俺達……幼い子供たちの中から適合試験を受けて各国より選出され……、さらに振るいをかけた後に俺達のような適合者はこの学園に集められた。大戦終結の混乱の中で無理な公募の理由は大戦開戦の理由を作った国家群勢力の抑制。……未だにこの世界には根強い二つに割れた構図がある。その抑制を続けるために俺達は存在し続けているのだ。『高機動破壊兵装』、その起源は八年前のある大災来がそれと言えるだろう。第三次世界大戦……。俺はその時に人生を奪われた。その災来を一口に言えば『大量殺戮』だ。たくさん血が流れ、たくさん街が爆撃の雨に打たれ、猛火に沈んだ……。俺はその時、8歳のガキだった。俺の故郷はイギリスのロンドン郊外。少し長閑な土地で牧草地が開けた場所だった。そこに空から悪魔共は押し寄せ……街は壊滅的な被害を受けたのだ。家、友人、家族を一瞬で……目の前で奪われた。気づいてみれば俺の居場所はそこにはなかったのだ。

「遅れ気味だな……急ぐか」

君達は安全だと信じた世界に裏切られたことはあるか？ 今はこんなにも綺麗な廊下を歩き、別校舎にある教室へ友人と話しながら向かうことができる。しかし、その時分は道などなかった。爆撃や戦車の通過で道や家屋のあった場所は区別が付かないうえ、そこら中に死体は転がり生きていても虫の息か怪我人ばかり……。俺もあと少して戦車に引かれるところだった。そのタイミングで俺はある意味での『救世主』に救われる。その白いフォームはまるで『白騎士』だった。あの時はその男のがむしゃらな操縦に答え……俺を救ったらしい。今はその白い高機動破壊兵装は俺の下にある。

「巴拉ディン
聖騎士」

『どうされた、主よ』

「今一度、問う。何故、俺を選んだ」

『貴方が、我が聖なる力を得るに値すると考えたからだ。あの男では無理だが……貴方の御心を救い出し、我が主が導けば「泰平」は確実に約束されましょう』

講義堂には空中に大きなディスプレイがある。デジタルスクリーンと呼ばれる像を立体にくみ上げて見せる技術もあるが光の角度に左右される上に見にくいため生徒には不評だ。ん？ その先か？ まあ、少し落ち着け、ちようど今はそれくらいの時期の記録の講義をしているからそれに合わせた方がいいだろう。……俺はその男が死ぬ間際に……この聖騎士パラディンという名前の『高機動破壊兵装』を託された。いや、運命だったのだろう。当時の日本の高官によればこの聖騎士パラディンは誰も扱えない『欠陥機スクラップ』として倉庫で眠っていたらしい。誰がアクセスしても反応しなかったそうだ。しかし、それはイギリスへのロシア軍の無差別攻撃に際して起動し、衛星の軌道データによれば俺のところにもつすぐ飛んで来たという。その時に聖騎士パラディンに搭乗していた機械技師らしい男は聖騎士パラディンの限度を超えた動きに耐えきれずに第一段の攻撃部隊を退けると唯一生き残っていた俺のところに来た。その男は今際いまわの際きわに俺にそれまでの経緯と聖騎士パラディンが何かを告げた。その時はあまり理解できなかったが……。そして、ロシア軍の爆撃機編隊や戦車大隊、突撃兵団は俺とこの聖騎士パラディンにより撃破。イギリスは大損害を受けたがロシアのそれ以降の進撃はなかった。何故なら……。

「日本は当時、アメリカに支援を要請されていましたが戦争へ好意的に意見せずにもしろ反対意見を述べてロシア、アメリカの両国に停戦を強く、強く求めましたがそれは聞き入れられず……」

何度この講義を聴いたことか……。情勢としては当時、社会主義

同盟のロシア、中国などとアメリカ、ドイツなどの資本主義国家連合が大規模な交戦状態にあった。そんな戦争中に中立国家が支援を断ったことにより攻撃されるといふ事態に発展……。そこで、日本及び新たな新派閥が結託して新たな『停戦協力同盟』を結成し戦争を停止させるために実力行使を開始した。その状況下で完成したのが『高機動破壊兵装』……略式を『HMBAS』だ。その戦力は圧倒的の一言に尽きる物だったという。特に『パラディン聖騎士』をベースに量産機体として製作され、初代の開発から今も第一線の量産数を誇る『一式マサムネ』は当時の陸軍戦闘において無類の強さを誇り、アメリカ軍の最新式重装戦車を真つ二つにできたのだ。その特殊な兵装は瞬く間に戦場を蹂躪していった。その結果、アメリカ軍やロシア軍は戦線維持が不可能になり日本、フランス、インドの三カ国が中心になり他の被害国への賠償を盛り込んだ調停を持ちかけ、戦争は一時的に停止している。あくまでも一時的な停戦状態ではあるが……。

「しかし、この学園が存在する理由はこの現代において中立国家としての日本やフランス、イギリス、インドなどを維持するために……」

そう、水面下では『HMBAS』を悪用した戦争が再び計画されているという情報が有るのだ。そのためにこの学園には史上最強のパイロットたちが存在している。俺達はそのために集められたのだから……。俺達は被害を受けた世界の国々には『救世主』と呼ばれているらしい。しかし、俺達の任務はその都度かわる。各国に要請されてもそこに行けるとも限らないところがあった。特に、俺のような立場の人間は顕著にその判断基準を変えなくてはならないのだ。俺はこの学園を守ることと視野に入れなくてはならない立場の司令官だからと言っておこう。

「第三次世界大戦の再発、第四次世界大戦への発展を避けるべく、抑制力として……」

大講義室は扇のような弧状をした部屋だ。その中では席順が決まっている。襟に付けられた階級証に準じた形に受けやすい場所に席順が並べられていた。形態だけを述べるのであれば、この学園は簡単に緩い規制の軍隊そのもの……。

「10分の休憩後再び講義を行う。一時解散！」

なぜ、緩いかと言えばここには女生徒が多く男子学生は数える程度だ。これは理由として人体の関係からだ。最新の人体学の関連データからの裏付けを基にしているらしいが、人間の男性は確かに以前のような一般兵装の形ならば筋力や体格の上では有利かもしれないが、実際のところは『HMBSAS』に搭乗してしまえば女性の方が有利だ。女性の肉体的な統計学的データベースから読みとられた特性として耐久性……忍耐、負傷対応能力、安定した向学心がある。残酷な言い方をする事になるがそこが男性とは違う『売り』、セールスポイントなのだ。それに、実際の搭乗者が操縦した機体データを閲覧すると女性が使用した機体の方が断然……男性と比べて機体との交信や信頼を示す感情発展度のバロメーターが高い。結果的に言えば、女性の方が言い方は重ねて悪いが『HMBSAS』の操縦に関しては有能なのだ。ならば何故、俺が居るかと言えば……。

「講義を終了する！ この後に教官と特待生組の模擬戦闘を見せる。30分後にスタジアムに更衣をしたのち集合。解散！」

デスクワークが終われば実技過程が待っている。先程の説明だが俺のように特別な『個体限定生産型』の『HMBSAS』に搭乗できる者がいる。ただし、それは製作の時点である程度の適合が示されなければならない。それをクリアした者の中でも更に運の良い者

が選ばれるのだ。更に……くどいようだが条件を加えれば、特に俺達のような専用機と呼ばれる『俺達にしか反応しない機体』を持った人間は特待生と呼ばれている。条件はこれだけではないが今の内はこれくらいでいいだろう。ここからは愚痴だが特待生と言うが多くの学園内での恩恵に負けて教官に小間使いとして実技演習の人数形として使われる。だが、特待生に関しては良いところもあり、学業成績がいくら低くても退学にされない。俺の場合は学業も実技も全て円滑にこなすが全ての特待生がそういう訳ではないのだ。特に今、俺の横を歩いているレヴィ・リーヴァ・ティエンは学業成績の通知書に成績不明と明記されている。彼女はこの学園で一番の変わり者だろう。アメリカ人だが祖国を恨んでいる。極端な性格で扱いづらいがそれを含めて彼女の力は俺が作戦を遂行する上で一番必要となる程に強い。教官は彼女のように無駄に強く扱いに困る生徒を嫌うが抑止力という意味ではアメリカ軍を止めて居るのは彼女の存在が大きいことを前提に考えていないからそんな思想ができるのだ。

「30分後にスタジアムだ」

「は！ 技能実習ですね。では、後程」

俺の副官のような立場の女生徒のレヴィ・リーヴァ・ティエン。破壊兵装番号3756番、特攻破装兵団団長。戦闘においての実績は言うまでもなく最高ランクを維持し……第三次世界大戦中に増えた人体実験の被害者の一人だ。

「よくあれだけ明るくなってくれたよ」

『主はあの者に執心だな』

「そんなんじゃない。俺はアイツを暗い闇から無理矢理に引っ張り出した。最後まで責任を持たなくちゃならん」

レヴィは生まれてすぐに軍の改造手術を施され体に数多くの異質

な力を植え付けられている。例としては無敵硬化を誇り、対戦車ライフルの弾丸すら受け付けない『アイアンメイデン鋼鉄乙女』や体温、匂い、姿などを全て断ち切る力……『インビジブル完全消失』などが主な力か。他にも付帯的につきまとう異常なまでの筋力や動態視力、反射神経などもある。……俺か？俺はもともと異能とは言わないまでもそういう力を体に備えていた。だから、あまり関係ない。俺の力は……いや、今はいいか。とりあえず急ごう。遅刻は俺のプライドが許さない。

「教官、今回は教官のお相手をするのでは？」

「いや、ティエンからの熱烈な志願を受けてお前との模擬戦闘を許可した」

彼女の容姿は普通の生活を送っていたのであれば男子なら野放しにはしない程の物だろう。美しく手入れの凝った髪、大きくはつきりした目と整った人形のような外見に美しい白地の陶器のような肌、細い手足、スタイルも良く、豊かな胸、くびれのついた腰……何故そんなことが解るかだと？目の前に肌に密着する形のガードスーツを着ていれば誰でもわかるだろう。ただし、ここからは恐ろしい話だ。先程、彼女が人体改造を受けたと説明はした。恐ろしいのは力のみではない。彼女はとある理由から自我があまりはつきりしていないようだった。俺からの指示で動くことが多いのだ。自発的にはあまり動こうとはしないが最近では自我も目覚めつつある。……あくまでもこれは例だが、俺は少しの侮辱なら無視をする。しかし、彼女は既に三年生の女性管理官生を再起不能に陥れたばかりなのだから。感情に歯止めが付けられないのか？いや、……喧嘩っ早いのだろう。昔から俺に逆らう時は酷く暴れた。そのたびに大変な目にあつたが最近では俺には反抗してこなくなっている。

「お前が相手か……」

「お嫌ですか？」

最近、感情の起伏の現れが顕著な彼女は何かと俺に絡んでくる。別に悪い気はしない。悪意もないしむしろ献身的な態度だからだ。ただし、戦闘状態においてのこのレヴィは相手にしたくない。教官の教習機では明らかに弱すぎる。防御がでさず大破するだろう。強力な破壊兵装のレヴィが操る『破壊士』ブラックロードは俺の操る聖騎士パラディンの持つ防御力が無ければ機体がもたない。根本的な問題として量産型軍事機よりも劣る性能の訓練機などではスペック自体が追いつかないのもわかる。

『双方、射出準備はいいか？』

「問題ありません」

『同意』

訓練の模擬戦闘であつても彼女が相手になるのはあまり気が進まない。彼女を相手にした教官機は大概が一撃で撃墜される。一昨日も教官機を一機、スクラップにしているレヴィは本当に強い。機体の性能は個体限定生産型のHMBSASの場合においてかなり特色が色濃く出る。

『射出！』

スタジオムへ機体を射出するカタパルトの推進力にも助けられるほどの俺の重装な装甲を保持した聖騎士パラディン。それに比べてレヴィの破壊兵装は軽い。いや、彼女の場合だけに限り『破壊武装』と呼んだ方が正しいかもしれないが……。聖騎士パラディンは多武器編装のマルチアタックメントで近接戦闘が基本だが近接武器のバリエーションにはこゝと欠かない。初期装備は大剣タイプ、片手剣タイプが二本、小手盾タイプが二つ、大盾タイプが一つ、あとは補助具が数個だ。対するレヴィの兵装はハルバート一本だけという恐ろしい軽装備で鎧や補

助装甲なども皆無。手足にバランスブースターと極化推進ジェット
ブラスターがついているくらいか。しかし、俺の聖騎士パラディンとの相性で
は彼女の方が有利だ。

『行きます！』

瞬間移動速度が秒速100キロを軽く超えるスピードでの突撃を
真芯に受ければ俺の重装甲ですら大ダメージを受ける。彼女の兵装
の大きな特性は防御力を彼女自身の力に頼る形に抑える代わりにハ
ルバートには最高峰の神経伝達システムを搭載しての攻撃性能の特
化、それは彼女の体のように動かすことが可能なのである。ただし、
機動力と攻撃力を跳ね上げる代わりに受ける代償は無装甲という無
防備さだ。破壊兵装の大きな特長は防御度と攻撃力の均一さと兵卒
生還率の高さなのだが彼女の破騎士ブラックロードはそれを視野に入れない怒涛の
攻撃性を売りにしているのだ。

『なかなか……お速いですね。でも、これならどうですか！』

円形のスタジアム内を上手く使いたる俺の機体にダメージを当
てようとハルバートで突進してくる。しかし、当たりはしない。俺
はコマンドーだ。味方の動きくらい把握できていなくては務まらない。
レヴィの攻撃が推進力を基にした攻撃形態ならば彼女の攻撃は
避けやすい。真っ直ぐにしか飛べないのだ。流石に秒速100キロ
の隕石に追尾されたならたまったものではない。それができたら彼
女は無敵だろう。

「こちらから行くぞー！！」

左右の腰に提げている片手剣タイプの武装を使用し彼女の突進を
止める。止め方とて一つとは限らない。正攻法の正面で受け止める

のは自殺行為だ。ならばどうするか……。俺の聖騎士は装甲を削げば推進力にも事欠かない。レヴィのハルバートが俺を狙う瞬間に片手剣を前方に突き立て、狙う位置を調整してスピードを落とさせる。流石にこちらが待ち伏せたところに突っ込む程レヴィもバカではない。だが、それが命取りだ。片手剣を彼女が弾こうとした瞬間に俺は背中 of イオンブースタージェットを全開にして体を一回転させレヴィに踵落としを放つ。まあ、こんなにありきたりな技では彼女を出し抜くのは無理だろう。案の定だ。ハルバートでガードされるがジェットはずっと推進力を上げ続けている。ちなみに……。ジェットの性能は俺の方が高い！

『くっ！』

破壊力はこちらの方が断然高い。ずっと力を溜め続けた俺の蹴りにとっさにガードとジェットで相殺を目論んだレヴィの体勢は悪すぎる。空中から叩き落とされて地面にぶつかり砂煙を上げていた。立ち上がるレヴィは破騎士の真髄を見せてくれる。破壊の輪舞曲だ。武装の破壊力を最高に上げる代わりに更に武装を強化する武装に備え付けられた戦闘様式と言えよう。あれをもろに受ければ命はない。左右の色の違う目が異質に輝き髪留めは収束された殺気のせいであつた……。髪が逆立ち体にまとう異質な熱源をハルバートに収束して……。俺に突進してくる。俺も今回ばかりは大剣で受けた。速さに追いつけないのだ。三分間を耐えきれば彼女はスタミナを消耗しすぎてバテるはず……。

「くそ……力を上げてるな」

『せい！ やあ！ とう！』

ハルバートの振りは読みにくい。先読みしようも上手く読めないのだ。どこから刃が現れどのタイミングで突きや斜め切りなどが来

るかもわからない。レヴィはそれだから好んであの武器を使うのだろう。破壊力、機動力などでは明らかに俺のあらゆる武器を超えるだろう。ただし、『頭』はどうだろうか……。

「レヴィ……甘いぞ！」

『うわ！』

レヴィの破騎士ブラックロードの大きな弱点は何も防御力だけではない。何故、彼女の破騎士ブラックロードは速度、攻撃力、機動力が大きく他のどの機体よりもひいでている。それが弱点になるのだ。まっすぐに推進してきたレヴィの体の推進力は引責や弾道ミサイル並だ。それは既に微細な機動を行うことができない。速度を上げ過ぎればこういう弊害も付きまとう事を皆は考えない。早ければいい……攻撃力、防御力、などが高ければいい訳ではないと言ふことだ。レヴィの攻撃の弱点は研ぎ澄まし過ぎた推進力と一点集中だろう。俺の武器は何も剣や盾だけではない。俺の攻撃は武道にも関係している。

「右に動けばいいと思っても動けないだろう」

『レヴィ、今回は諦めましょう。彼には勝てません』

『また、負けるのか……』

ハルバートをつかんでいる右腕に手をかけてハルバートを落としジェットを下方に噴射して垂直降下し地面に激突する寸前で抱き上げる。そこからは……。スタジアムの外部では教官機が動き続けている。おそらく、最近多発している謎の敵からの襲撃だろう。攻撃し機動が停止すると爆破する仕掛けになっている。データの収集はおろかパーツの回収すらさせない作りなのだ。俺は教官機の護衛にまわる一機……二機……教官機が落ちた。装甲解除！ 教官機に迎え！

「^{パラディン}聖騎士だ！ 百人力だぞ！」

装甲を最低限必要な物にし教官機に指示を出し敵を撃墜していく。味方はほとんど退避させ、敵の無人機を破壊していく。俺達パイロットは疲れがあるが向こうはバッテリーという形式的な体力と変化しないアビリティを持っている。俺も一人では厳しいのだ。だが、そこに俺の相棒が現れた。

『到着が遅くなっちゃってすまない！ ^{パラディン}聖騎士！』

『遅いぞ！ ^{ヴァンジュラ}金剛杵！ 中空に移動し敵の機動装甲兵を撃破しろ！』

俺は下で戦う。いいな！」

『了解！』

インド人留学生のインドラだ。彼は俺の左腕に当たる人物と言えるだろう。実質、レヴィとは違い肉弾戦闘を苦手とする変わりに後方からの強力な破壊砲撃が得意なのだ。破壊用の強力な武器が多い。俺の近くの敵兵は奴の雷撃砲と呼ばれる雷を集束させて放つ兵器の遠距離砲撃で貫かれエンジンを破壊するのだ。

「ま、アイツなら当たり前か」

『コマンドー。指示を』

「レヴィ、味方の生き残りは脱出させるんだ。パイロットの代行は簡単には作れないんだ！」

そう、仲間は救出しなくては、俺は誰も死なせはしない。そこには続々と味方が集まりだした。白銀の弓を構えた中装装備の女生徒が後方からレヴィの横につく。速度は並、機動も並だが、味方のパイロットを担いで内部に運んでいく。インドラの補助には体を変化させられる異能者の女生徒が付きドラゴンに変身した状態でインドラの後方から近づこうとする近距離戦闘方の兵器を破壊しにかかっ

ている。味方は次々に集まってきている。その時……、レヴィがいつものことであるが命令無視をする。

『未確認の有人機を発見……救出に向かう』

「レヴィ！」

『私も補助に向かいます。コマンダー』

「了解。ヴィヴィレットはレヴィの補助に徹してくれ」

『了解しました。コマンダー』

多くの味方兵装が機動した。この分なら問題はないだろう。俺は機動用の軽装に切り替え装甲を背中に集める。俺の装甲は何枚にも重ねられた物だ。その内側には多くの可変式ジェットブースターを搭載し多くは使われていない。機動型に変形すれば俺の速度はレヴィに勝てないにしてもそれに近いことができるのだ。破壊兵装は形態を変形することで機能を変えられる。俺の聖騎士パラディンには初代設計者の遊び心と言うか……機能性の関係というかで多くそれが備えられていた。聖騎士パラディンは可変兵装でもある。

「敵の旗艦か……」

『殲滅しよう。大天使アークの使用で有れば私は負けない』

「ああ、そうだな。適正武器は……」

『ロンバルディだ』

「解った。久しぶりに使う武器だ。慣らさなくても……」

『大事にはならんだろう』

交信を続けることで俺達と破壊兵装は神経伝達のリンクを高める。この聖騎士パラディンは最初で最期の最高級の謎に包まれた機体だ。俺の力に強力にリンクするこの兵装。それは……俺にしか使えない最強の兵装。それがこの聖騎士パラディンだ！

「敵の高機動破壊兵装が接近……あれは……パラディン聖騎士です！」

「なに？ パラディン聖騎士にはあのような形態は……新形態か？」

「右舷の先回翼とエンジンを破損！」

大剣のロンバルディは特殊兵装の中でも特殊な物だ。というよりはパラディン聖騎士の兵装は他の機体とは違い武器と武器を接続できる。片手剣と片手剣でダブルセイバーや補助具と大剣でランス、など様々。この兵装にかなう物はない！

「一気にエンジンを貫くぞ！」

『御意』

「神の鉄槌を我が名の許に行使用する！ サイレンス！」

速度を急に上昇させることのできないこのパラディン聖騎士はそれが大きな弱点だ。逃げる事ができない代わりにこの機体は防御力を極限まで上げるといふ兵装の強化を行ったらしい。だが、この俺とパラディン聖騎士で考案したこの新形態、アーク大天使を使えば……、準備さえできていればこの力は何者をも凌駕できる。兵装の限界？ ない。人と意思を共有できたこの俺の相棒となら……俺達に限界はないのだ。

「うおおおおおおお！」

敵の動力炉を突き破り機関を撃墜する。その後は俺も学園のスタジアムへ入り皆の無事と被害を確認した。教官に一名だけ重症者がでたが命に別条はないという。それに不可解なことも多い。レヴィの帰還と同時に大破に近い破壊兵装と少女を保護していたと言うのだ。レヴィが珍しく負傷して帰って来たらしく皆が戦闘の激しさを感じ取っていた。確かにそうだ。闘気の塊を体にまとうことで弾丸やレーザー砲のような兵器ならば聞かないはずの彼女が……弾丸を受けて負傷していたらしい。

「今回の戦線……不可解だ」

「そうだな。聞くが、何が？」

「解らないならいいさ」

そう、解らないなら……な。

破壊乙女の決意

早朝、四時に起床。部屋でのフットワークトレーニング、ジムに入りウエイトトレーニング、ランニング、射撃訓練……日課をこなしていると最近彼の事が気になる。私の名はレヴィ、レヴィ・リーヴァ・ティエンだ。世界で三番目の『高機動破壊兵装』に適用できた人間らしい。力？ そんな物に興味はない。私の力は破壊するために作られた。だが、今の私は違う。人間に力を添加する技術は私は体を受けて『改造人間』として暗くジメジメした世界で育った人間の中で私や彼のように黒い部分を持つ人間がここには多い。

『あなたは彼に自由を手渡されたのに……何で彼に執着するの？
レヴィ』

「気にするな。私の勝手だろう。あの人に助けられなければ私は生きていかなかったかもしれない」

今更なことだが私は高機動破壊兵装が彼らのように機動装置で起動するわけではない。私の体にはアメリカ産の高機動破壊兵装の破騎士^{ツクロード}が埋め込まれている。経緯は複数ある。私が……彼に直接助けられたことも関係していた。抱きかかえてくれた小さかった彼の腕や体の記憶はまだ、強く残っている。聖騎士^{パラディン}の兄弟機であるこの破騎士^{ツクロード}を受け入れることで……今でも彼の傍に居ることができる。いや、私は実は気づいていた。私は彼なしでは生きていけないのだ。

「先日保護した少女の機体はシリアルナンバーが未認可の物でした。それに、量産機でもありませんし……不覚にも弾を受けたのは彼女の腕が相応の物だったからです」

「そうか……機体の名は？」

アフソリコート・バレッタ

「絶対閃光線……最新式の支援射撃型兵装です。生産国は……パー

ツの種類からロシアかと」

私の槍を恐ろしく軽い動きでかわすこの少女には私と同じ匂いを感じた。だから、私も私の力を使って……少し無茶をしたが昏倒させて……捕まえる。私にも……少々暗い過去がある。私は……大きくなラボですつと生きて来た。暗く湿った空間に……閉じ込められていたのだ。そこに現れたのは彼、クリード・クロス様。私の命の恩人だ。

「懐かしいか？」

「は？」

「お前がそういう顔をするときは昔からそうだ。出会った時のことを思い出しているのだろう。物好きだな」

「そ、そんな。私は、今でもあの時のことを忘れたことはありません」

「いいか？ 俺は忘れると何回も言ったはずだ。レヴィ、お前にはお前の人生がある。取り返せないな」

あの人はいつも私に背を向けて私のところから消えてしまう。私は……こんなにも彼を思っているのに……。……らしくないところを見せた。絶対閃光線の所有者が目覚めたと聞き私はそこに向かう。もちろん、クリード様が横にいらっしやるが……。私には目もくれない。これにも訳がある。私は研究所では素体として扱われていたため記憶と覚しき物は欠片もない。だから、彼は言うなれば私の『父親』に近い人なのだ。彼は私には人一倍厳しい。同じ年齢ではあるが私には彼以上になれる物はない。それに……。私には身近な家族のような仲間しか仲間意識を保てないらしい。少しでも敵意がある相手であれば……。殺してしまいかねないからだ。先日も彼によれば年上からの嫉妬らしいが……。相手を叩きのめしてしまった。

「レヴィは部屋に戻れ。一度は戦闘をした相手だ。パニックを起こされてもたまった物ではない」

「では、部屋の外に……」

「命令を聞き入れる。部屋に戻り大人しく部屋で待機だ！」

また、私は拒絶されているの？ いや、違う。私の判断力が曖昧になってきているのだ。……刃を交えた人間が近くに居ては信用を得ることすらできない。それにだ……。ここは紛いなりに軍事関連の施設である。私に撃墜されたと言うことは相手は捕虜になったと考えるはずだ。大人しく私は部屋に戻る。部屋に戻り私のすること……。ベッドに突っ伏して時間をつぶすくらいだろう。実際、朝の訓練はクリード様から許可が下りたものだ。だが、他の訓練所使用には彼からの自記筆サインを提示する必要がある。それを手に入れる段取りを今は行動に組み込めないために私は隙をしていた。私が訓練以外にすること？ はは……。こんな私に友人が居るとでも思ったのか？ 私服もなく、軍服の予備を着回して生活し最低限の家具以外の家具を入れない私には他にすることなどない。私のことなどいいか……。少し、覗き見よう。私の異能には体に少し負荷がかかるが使える力が多い。意識をわざと飛ばして、彼らの部屋に飛ぶ『魂霊離薄』スピリット・インスピレートが使える。よし、行くか……。たまに、私は彼の生活に入り込みすぎってしまう。先日の彼が苦しんだ夜に私がそこにいった理由は『魂霊離薄』スピリット・インスピレートを使って彼の部屋に居たからだ。もっと触れていたい……。一緒に居たい。でも、私と彼の立ち位置が変わらない限り、私は……。ずっと本物の『背後霊』のように彼につきまとうことしかできないのだ。

「楓、入るぞ」

「はい。どうぞ」

内部には彼を含めて三人。少女は少し前までは楓と話していたら

しいがクリード様が入った瞬間に口を噤んだ。確かに、彼には威圧感がある。彼の目の下には大きな切り傷があり戦闘をこなしてきた歴戦の軍人と言えそうな空気があるのだ。ただし、そうではないことを教えたい。彼は決してそんな人ではない。私は彼の剣だ。彼はあくまでも私を振るう主……。私が暴れればもちろん、彼も傷つく。よって私が傷つけたものだ。彼の傷の大半は幼い頃に受けたものらしい。それに、彼が前線に出ることは稀で、最近の防戦においても周りの味方が出払った時にのみ動き出す程度……。

「体調は……よさそうだな。あまり、俺はいない方がよさそうか。だが、これだけはここの管理官として言わせて欲しい。この学園島は君に敵意を抱かない。君が抵抗したための一時的な措置で撃墜をしたが君が望ならここに居続けるのもよし、機体が回復した後に出るもよし。君に決定できる。我々は仲間として君を歓迎する。以上だ」

クリード様らしい。彼がこちらに向かう道に来た。急いで体に戻る。私の体はベッドに突っ伏したままの状態だ。……よし、戻ったな。クリード様の出迎えをするために部屋の外に出る。クリード様はお優しい方だ。厳しい人でもあるが私はあの人と居られればこんな喜びはない。

「レヴィ……お前に少しの休暇と臨時給金が出た。今回の功績は以前の判断によるものが大きいから……。欲しいものや行きたい場所があれば連れて行くように言づかった」

白と青を混ぜたような瞳に見とれているとクリード様が訝しげな顔をした。私は何かしたのかと少し気持ち沈んだが……彼から出た言葉が意外だったのでこちらも驚いた。

「熱でもあるのか？」

「は？」

「お前、最近おかしいぞ。レヴィ……風邪なんかなら早く言ってくれ。お前に倒れられては困るからな」

別に風邪なんかひいていない。強いて言うならクリード様に見られることが増えてよくわからないホワホワした気持ちになる。彼に見つめられると直視できなくなるのだ。クリード様が私に気をかけてくださるのは二人切りの時だけだ。『父親』の厳しさと『兄』のような優しさを私はもらえる……家族の記憶などない私にはこれが堪らなく嬉しい。こういう時はいつも調子に乗ってしまう。それで怒られることも間々ある……だが、今回は受け入れられた。

「クリード様との外出ですか？」

「ああ、当たり前だ。俺が居ないとお前は外出許可がおりないからな」

「映画に……行きたいです」

「映画？」

「はい……」

自分でも気づかぬ間に胸の前で指を弄びながら顔を赤らめていた。正気に戻った時に窓ガラスに映った自分の姿が……女の子の姿をしていて驚いている。もちろん、最近の話だ。私がこんな自分でもわからない感情を抱き始めたのは……。クリード様は先に小さく笑うと楓とレンを呼んだ。少なからず嫌な予感がする。

「レヴィに服を見繕ってくれないか？」

「お安いご用よ」

「はい、レヴィさんにですね。畏まりました」

楓は美人で気だてもいいし日本人の『大和撫子』という言葉が似合う人だ。同年で姉妹のような私としては……楓は羨ましい。クリード様に拒絶されることがどんときもないからだ。レンは来年に二十歳を迎える姉貴肌の上官で私の姉のような存在だ。彼女に助けられたところは大きい。彼女がいなくては私もここまで立ち直るのも難しいことだったと思う。クリード様は『女の子』にしかわからないことは彼女に任せていたとたまに教えてくれる。そこで、レンに二人切りになった時に聞いてみた……。

「レン……」

「何？」

「この……胸がキュンとなる感じ……何かな？」

「……レヴィ……まさか、恋してる？」

「恋？」

「あ、ごめん。わかんないよね？ クリードに対してだよね？ それ」

「うん……」

「『言葉遣いまで徐々に変えるくらいかあ……』うん、レヴィには良いことだけど。自分で気づいた方がいいよ」

結局……『恋』という単語以外は掴めなかった。私は感情を育成する人との交わりを幼い時に絶たれていたため感情の成長は全くと言ってなかった。それが今は怒ることや喜ぶこと、悲しむことなどを理解した。新しい感情なのか……ちよつと待て……私にも羞恥くらいあるぞ？ な、何なんだ……この無駄に露出の大きな服装は……私はこんな服を……。

「クリード！ こんな物？」

「ん……」

「は、恥ずかしいです……。は、破廉恥です！」

私のいつもの服装では長袖長ズボンの防護服だ。肩が露出して、肌……特に腹まわりが寒い……。ヘソ出し？ それに……。下着が見えそうなくらいに切り詰めたスカート！ 恥ずかしすぎる！ ……私、死にたい。

「く、クリード様……。死にたいです……」

「似合ってるよ」

「え！？」

「ほらほら……。クリードが似合ってるってさ。レヴィ」

「で、でも……。せ、せめて、長袖……」

「ああ、そうね。この日差しじゃレヴィの肌だと爛れちゃうかも」
「そうですね。なら……」

え？ ヘソ出しは解消……。でも、肩はそのまま？ ……何て言うのか知らないけど袖を無理やりつけたようなフリフリレースが沢山ついた袖のような物に着替えさせられて黒と白のゴシック調のレースがついたミニスカートに黒いニーソとか言うやつを履かされた。おまけに靴は踵かかとのところが高くて歩きにくい……。おまけついでに言うが黒いレースがついた日傘を持たされミニバッグも同調、髪も縛られてしまい小さな帽子まで乗せられ……。私はマネキンじゃない！

「お待たせしました……」

「ヴィヴィレット……。お前、図られたか？」

「いえ、そのお召し物は元々私の持ち物です。胸回りに少々間があるため……。レヴィ様にならと……。お気に召しませんでしたか？」
「あ、ああ、いいと思う……。ぞ、ダメだ……。断れない」

ヴィヴィレットはギリシア人のお嬢様のはずだが私にいつもべっ

たりで……。ヴィヴィレットの世話が鬱陶しいのもあり私は男子寮のクリード様の部屋の隣に入ったのだ。二人切りの予定がとんだ……あれ？ ヴィヴィレットが先に居なくなつた。実家の家族と合うらしい。私はその服装のため出発から死にそうなほど恥ずかしかつた。クリード様はお家の関係から私服にもそれ相応の装飾がある。彼のお家は騎士のお家で肩当てと靴に金属製の装飾が多い、全体的に白い格好だ。

「傘くらいは持とう」

「いえ……、そんな……」

なんとという縛り方が知らないが今の髪型は少し気にくわない。首に巻き付けるように緩く太い三つ編みを前に持つてくると言うものだ。私は一つ縛りが好きでいつもそうしている。だが『似合っている』と言われては……。

「も、申し訳……ありません」

「何を謝る必要があるんだ？」

「こ、こんな、女々しい醜態をさらして……」

「そこは俺が謝るべきところだよ。レヴィ」

彼は私の傘を持って日から隠してくれている。ついでに自販機からペットボトルのお茶を買ってきてもらいベンチに座つて話をした。映画は口実で実は二人で外に出たかっただけだ。私も……この感情が何なのかよくわからない。けれど、彼と居られると嬉しい。クリード様は私に向かつていつにない優しい声で私に語りかけてくれた。彼はいつも型口な感じの強い人ではあるが二人きりだったり気を張り詰めていないときは普通の口調に戻る。私としてはいつもそちらでいてほしい。

「俺は血なまぐさいことしか君にしか教えられなかった。本当は普通に女の子として生きてほしかった。俺や他に縛られない生き方をしてほしかったんだ。でも、少し手遅れだったな。『破騎士^{ブラックロード}』のレヴィのシンクロを軍は知っていたからな」

「私は、そうは思いません」

「確かに、レヴィからすれば俺は唯一の希望に見えたかも知れないが今は仲間はたくさんいるだろ？」

「そういうことじゃ……。クリード様は私にとっての唯一。それは変わりません。仲間がいくら増えても、その立ち位置だけは揺らがないんです」

女々しい私を見るとクリード様は安心したように立ち上がり私の手を取ると先導してくれる。確かにそうだ。私はあの要塞から出たことが無い。だから、道など知らないし私のことを知る人もいないだろう。クリード様は私の横を歩きにくい私に合わせてあるといれる。編みこんだ髪の毛のせいで首元が暑い。それに気付いたらしいクリード様が普通に解いてくれる。縛りなおしも……。そうだ、私があそこに来た頃は彼が私の世話をしてくれたのだ。レンや楓は私やクリード様の後に来た。だから、最初は人見知りもよくしたらしい。

「それから、従者や召使いの関係じゃないんだ。それに中世でもない。その……『様』ってのは何とかならないか？」

「はい、……でしたらクロスさんなどでは？」

「何で姓になるんだよ」

「クリードさん……なら、いかがですか？」

「『さん』も要らん」

「クリード殿……」

「なんか、様と同等な何かがついたぞ」

「く、く、くり……クリー……クリー、ド……クリード殿呼べば……」

「……」
「ついでに敬語も払えると楽だな」

顔が……にやけてる。この時のクリード様は私をからかって遊んでいるのだ。私だって今日はいつもの従順なレヴィ・リーヴァ・テイエンではない。任務の時は上官の命令は絶対である。……いや、私はよく命令無視をするがな。私の言葉使いは型口の彼の物だ。私は言語の習得は七歳半からで少し遅れ気味だった。そのせいか私には大きく欠如したところもある。それだが……。彼には絶対に譲らない。私の彼への思いは……。

「あまり無理をおっしゃるとずっと『クリード様』のまま呼び続けますよ」

「お、レヴィが怒ったな」

「怒らせて楽しむとはずいぶん高尚なご趣味なことだ！」

「はは、でも、……これだけ気持ちの面で成長してくれると俺も嬉しいよ。あの頃はずっと能面みたいな顔だったし」

「……私は、あなたからすると何なのですか？」

核心をついたようなことを聞くと彼は私に向かって結構あっさり答えてくれた。残念でもあるが……今の私ではその程度なのだろう。悲しいかな……。それでも、私は幸せだ。一時期は私はアメリカの分校に引き取られるという話になったのだが……私をずっとそばに置くように彼は策を回してくれたりもしていた。だから、私は彼が好きなのかもしれない……。！？好き？ 私が？ クリード様のことか……。恋とはこのことなのか？ レンの言いたい事はこういうことだったのか？ そんなことを考えていると映画館についた。私としては初めての映画館で興奮気味だ。彼は私を席に座らせていると何か白い物が入った箱を私に手渡した。結構大きな箱だ。ジュースもついでに買ってきてくれたらしい。彼もつまむその白い物を

口に入れると……甘い……。昔、彼から貰ったキャラメルの味がする。

「そうだな、レヴィは知らないよな。ポップコーンっていうのさ」

「ポップコーン？ キャラメルの味が……」

「キャラメル味のポップコーンだよ。結構いろいろな種類があるんだぜ」

「美味しです」

「材料さえあれば楓も作れるはずだから頼んでみるか」

それから数分して映画が始まった。……レンに選んでもらってチケットを貰ったのだが……。はめられた……。明らかに性交の含まれる映画ではないか！ 私がいくら無知で感情表現に乏しい籠の鳥だったとしても生理的な面での発達や本能などはちゃんと発達している。それだからこういう物を見せられると……。赤面して見てられない。

「レンめ……はめたな……」

「どうした？」

「い、いえ、何でも……ないです」

「ま、レンが変な気を利かせたことくらいは解ってるよ。でも、これくらいの映画で赤面は少し子供だぞ。レヴィ」

な！ なんですよ！ それは少し新しい知識？ いや、これも彼は私をからかっているが……。実際、彼は普通に見れている。昼間にこういう映画ということもあるのか周りの客はまばらで私たちを含めても数組のカップルしかない。私たちも周りからはそう見えるのかも知れないな。……勇気を持って前を見るが……。あ、ダメだ。無理だ。思わず彼の手を握ってしまった。

「くす」

「わ、笑いましたね」

「ん？ ばれたか？」

「解ります。何年一緒に生活してるんですか」

「ああ、すまない。最近のお前、女の子してくれて面白くてな？」

「は、はあ……」

彼も気づいているらしい。17にして始まった私の変化に……。

人間として体の発育はしても心の発育はかなり遅れてしまっていた。それが対に開花した……と彼は言っている。だが、すぐに、彼の顔が暗くなった。真つ直ぐ映画の方を見て口を大きく開かない喋り方の彼はあまりいい事を口にしない。これまでの経験だ。これまでも彼は私を遠ざけている。今回は少し意味が違うことではあった。でも、私を遠ざけようとしていると感じる。

「本当は……俺に心を許すことをさせたくなかったんだが」

「え？」

「解るだろう？ 自分がその世界に身を投じれば解ると思う。俺はいついなくなるか解らない存在だ。レヴィが……仮に俺の名中で大切になり、俺のことを共に愛するようになったとする。俺かお前が戦場で倒れ、先立つことになったとしたら。俺はお前に先立たれたら正気を保てる自信はない」

「……そんなことまで」

「ああ、お前は俺が先立つような未来を歩みたいか？ 嫌だろう？」

だから、俺はこれまでお前を無理にとは言わないが遠ざけようとしていたんだ」

理にかなったことを言われると否定はできない。私はいつも彼と
いう籠に守られて過ごした。最近は任務中の命令無視をするように
なった。その頃からだ。彼と『^{パラディン}聖騎士』が空を滑空して戦場を駆る

姿を多く目にするようになったのは。よくよく考えれば彼の指揮する陣形はいつも誰かを囿にするような陽動陣形を取らない。取るにしても彼が囿になることをする。……私や他の人間に滅私を取らせない癖に自分は取る。全く身勝手な司令官だ。

「私はそんなに弱く脆いのですか？ そんなに役立たずですか？ も、申し訳ありません。少し気を張りすぎました」

「別にいい。今は上司部下の関係は無しだ。言いたい事を言ってくれて構わない」

「私は、あなたに守られるだけは嫌です。これからは……私はあなたを守るだけのことをしたいのです」

「そうか、なら。あまり俺に」

「関わるなはなしです」

「前線に……」

「出るなも却下です」

「……軍を辞めるか？」

「それは最悪の事です。貴方と共にいられば問題は有りませんが」

絶句する彼の青ざめた顔を見ずに私は首飾りを弄ぶ。この首飾りは軍の最上位の攻撃チーム『正義』^{ジャスティス}のメンバーがもっているマークをパズルのようにバラバラにした物だ。私は映画の内容おほとんど見ていないが……今日は大きな収穫を得た。彼に……約束させたのだ。これからは私を拒絶させない。私も、彼に認めてもらうのだ。もう、お下がりには嫌なのだ。

「おはようございます」

「おはよう。相変わらず早いな」

「では、本日の訓練と就業のご予定から確認します」

私の地位はあれから急に上がった。おそらく、彼はずっと私のこ

とを近くで見て管理さしておくために調整していたのだ。レンやヴィヴィレット、楓などとやっと同等になったのだ。一応、まだ、彼の管理下にあるという形らしいが彼の口ぶりではもう、ほとんどの制約を排除してくれたらしい。ただし、国家級Sランク戦力の私は外出はやはり彼と一緒にでなくてはならない。

「私服にも慣れたか？」

「はい」

「だが、とことんスカートを嫌うな」

「私はあんなひらひらした物は向きません。短すぎるものは破廉恥ですし」

私の日常は大きく変化した。数日間の変化を周りのメンバーは『レヴィの三日変化』などと昔の事変をひっかけて噂にしていた。…羅刹女レヴィは……。卒業ということらしい。それに、私にはもう一つ目標ができた。

「エレノアとか？」

「はい、エレノアと話したいです」

「もう少し待て……俺でも人見知りされてるんだ」

「……なら待ちます」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3815x/>

Cross & Ballet

2011年10月21日01時06分発行